

## ジッド「チュニスの解放」をめぐる書誌的考察

吉井, 亮雄  
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/2203078>

---

出版情報 : Stella. 37, pp.281-290, 2018-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



# ジッド「チュニスの解放」をめぐる書誌的考察

吉 井 亮 雄

ジッドは戦時下の1942年5月初め、避難先の南仏ニースを離れ、マルセイユから乗船、6日にチュニジアの首都チュニスに到着した（逗留先は市郊外シディ＝ブ＝サイドのテオ・レイモン・ド・ジャンティル宅）。その後11月末にはドイツ・イタリア軍が同市を占領。翌43年に入ると、たびたび空襲が続くなか、1月と3月の2度にわたりフランス帰国の可能性を提示されるも、この誘いを断っている。幸いにも5月7日には連合国軍がチュニスに入り、同市を奪還。3週間後、作家はこの地を立ちアルジェへと向かい、翌6月にはド・ゴール将軍と会食の機会をもっている。

さて、チュニス滞在中もジッドは定期的に日記をつけており、それらの記述はやがて1950年刊の『日記（1942-1949年）』や、没後出来のプレイアド版『日記』第2巻（1954年）などの単行版に収められるが、43年の数ページ分だけは早くからいくつかの新聞・雑誌に発表されていたのである。この事実は初出掲載の不正確な出典のほかは、現在までほとんど指摘されることがない。些末な事柄ではあるものの、またいまだ調査・探索の及ばぬ点はあるものの、小稿では、当該記述が先行発表された経緯について若干の補説を添えつつ、いくつかの書誌情報を確定・提示したい。

## 『シリアとオリエント』紙

「43年の数ページ分」とは、連合国軍によるチュニス奪還とこれに続く1週間の模様（5月7-14日）を綴った日記抜粋のことだが、それがジッド本人によるタイトル「チュニスの解放 *La Délivrance de Tunis*」を冠し、初めて活字化されたのはバイルートのフランス語日刊紙『シリアとオリエント *La Syrie et l'Orient*』においてである。この事実じたいは、ジッド著作の総合的書誌（1889年から1973年までが対象）を作成したジャック・コトナンがすでに指摘

していたが、彼自身は当該紙を参照することがかなわず、ジッドに寄稿を請うたジャン・ゴームエの後年の証言を出典の情報源としていた<sup>1)</sup>。したがって、まずは初出掲載に先立つ後2者の遣り取りから紹介しておこう。

ゴームエ (1905-1997) はオリエントに強い関心を抱きつづけた作家・大学教員だが、ド・ゴール将軍の知遇をえたことを機に、当時はバイルートで対独抵抗組織「自由フランス」(42年7月「戦うフランス」に改称)の情宣・ラジオ放送部門を指揮し、その立場から『シリアとオリエント』紙の責任者も務めていたのである。ヴィシー政権の執拗なプロパガンダに対抗すべく、現地在住のフランス人にむけた紙面構成を心がけ、毎土曜日にはベルナノスやエリュアル、アラゴン、ヴェルコールらレジスタンス作家・詩人のテキストを転載していたが、北アフリカの解放後ジッドがアルジェに滞在中であることを知ると、彼に連絡をとり同紙への寄稿を依頼する。

ジッドは43年7月24日の返信で快諾し、時宜的に「読者の関心を呼びそうな」テキストとして上述の日記抜粋を提案、5日後にはその転写稿を送った(同便がバイルートに到着したのは8月5日)。作家の懸念はただひとつ、チュニス解放直後のアラブ人住民への言及が不穏当ではないかというもので、その取捨はゴームエに委ねると書き添えている<sup>2)</sup>。「奇妙なことには、これまでこの都会では各国語を話していたのに、今日はもはやフランス語しか聞こえない」という文言に続く一節がそれである――

イタリア人は沈黙し、身を隠している。そしてアラブ人の姿はほんのわずかしか見えない。壁という壁に貼ってある〔北アフリカの軍事指導者アンリ・〕ジロー将軍の布告のなかの、威嚇的で不明瞭な文句が彼らを恐怖で満たしている。彼らは不安な気持ちでいる。こうした漠然とした威嚇は自分たちを標的としたものなのかと心配しているのだ\*)。彼らは隠れてはいないと言えるだろうが、祝典にはまったく加わず、アラブ人街に籠もっている。だから歓呼の声を上げている群衆のこの騒々しいごめきは、大部分が(そしてある地域においてはほとんど全てが)ユダヤ人たちだ。皆、口々に「フランス万歳！」と叫んでいる。

\*)「悲惨と苦痛をもたらした敵の仕業を幫助した者は、容赦なく即刻処罰されるであろう。余はそのことを正式に約束する。我々のあいだには裏切り者の占めうる場所はないのである」<sup>3)</sup>

結局のところジッドの懸念は杞憂に終わり、この一節はゴームエの判断のもとそ

のまま掲載される。また後続の紙誌掲載や単行版のいずれにおいても削除されることはない。

前述のように、「チュニスの解放」の初出掲載を知ったコトナンが1970年頃さらに詳細な情報をゴーマエに求めたところ、後者は次のような回答を返している――

残念ながら、私には〔ジッドの〕日記の抜粋が『シリアとオリエント』のどの号に載ったかを明言するはできません。私自身はこの新聞の揃いを持ってはおりませんし、また同紙はどこにも、レバノンにおいてさえも――戦後、同国のフランス大使館は自由フランスの運動にかんする記録保持にはまったく無関心だったので――完全な揃いは残っていないはずです。

当該記事が、この新聞の1頁全面を占めて（そのことははっきりと覚えています）掲載されたのは、おそらく1943年8月のことでした。<sup>4)</sup>

だが、元編集責任者の記憶は正確さに欠けていた。たしかに『シリアとオリエント』は参照容易ならざる資料ではあるが<sup>5)</sup>、「チュニスの解放」が実際に掲載されたのは同年の9月4日号、またテキストは「1頁全面」を占めたのではなく、新聞の紙面がしばしば採るように、2つに分割されて第3頁と第4頁に跨がるかたちをとっているのである。

### 『フリー・ワールド』誌、『ル・モンド・リーブル』誌

先に言及した7月24日のゴーマエ宛書簡でジッドは、「チュニスの解放」はニューヨークの『フリー・ワールド *Free World*』誌にも掲載予定である旨を伝え、各国間の情報流通が滞っている現状では「独占掲載」にこだわる意味はあるまいとも書き添えていた<sup>6)</sup>。

『フリー・ワールド』は、ニューヨークに本部を置く「国際フリー・ワールド協会」が1941年10月から46年12月まで発行した英語月刊誌で、同盟国を支持し反ファシズム・政治的自由主義を標榜するルイ・ドリヴェ（1908-1989）が編集の中心を担った。同協会は多くの国々に連携のネットワークを張り、英語版に続いては順次、スペイン語版、中国語版、フランス語版が発刊されるが、ジッドと『フリー・ワールド』およびその姉妹誌『ル・モンド・リーブル *Le Monde Libre*』（1943年5月カナダ・モントリオールで創刊、初年度は年2回の発行、以後は45年11月の終刊号までほぼ季刊）との間を仲介したのは、両誌

の「国際編集委員会」の一員リュシアン・ヴォージェル（1886-1954、『フォイエ・ダール』や『ヴォーグ』フランス語版などいくつかの雑誌を主宰）で、彼がニューヨークから発信した43年9月21日付ジッド宛書簡には次のような文言が認められる――

〔…〕チュニス解放にかんする日記抜粋を有難うございました。玉稿は『フリー・ワールド』の今月号と、フランス語版『ル・モンド・リーブル』の次の号に発表されます。また我々の4つのラテンアメリカ版にも確実に掲載されるでしょう。<sup>7)</sup>

まずは英語版・フランス語版についての書誌情報から――。ヴォージェルが述べるように、『フリー・ワールド』は「The Deliverance of Tunis」の英語題を冠した全訳（アルバート・リップマン訳）を10月号（刊出はおそらく9月末）に、また『ル・モンド・リーブル』はその第2号（同年12月）にフランス語原文を掲載する。ちなみに両誌ともウィリアム・ローゼンスタインによるジッドの肖像デッサンを記事の冒頭に掲げた。さらに付言すれば『ル・モンド・リーブル』は誌名の上に「La Délivrance de Tunis par André Gide」と特記し、ジッドの寄稿が同号の目玉であることを強調している。

いっぽう「4つのラテンアメリカ版」というヴォージェルの記述は俄には信じがたい。というのは、この時点で『フリー・ワールド』の姉妹誌は、『ル・モンド・リーブル』と中国語版『自由世界』のほかは、スペイン語版の月刊誌『ムンド・リーブレ *Mundo libre*』が2カ国（メキシコとプエルトリコ）で出ているだけだからだ（後にはギリシャ語版も発刊される）。筆者が参照したかぎりでは、このうち少なくともメキシコ版には「チュニスの解放」のスペイン語訳は掲載されていない。プエルトリコ版・中国語版については未見のため確言はできないが、おそらく事情は同様だったのではあるまいか。

『ラ・フランス・ヌーヴェル』紙、『架空会見記』（フランス語版）

さて、『フリー・ワールド』での英語訳掲載後、「チュニスの解放」は『ル・モンド・リーブル』に先行して2つの媒体に発表されているので、これらにも触れておこう。まずは、アルゼンチンの首都ブエノス・アイレスで発行されていたド・ゴール派の週刊紙『ラ・フランス・ヌーヴェル *La France nouvelle*』。同紙の10月15日号にフランス語版全文が載ったが、そこに付されたキャブ

*La Délivrance de Tunis par André Gide*

# LE MONDE LIBRE

*La Renaissance  
de la Démocratie Française*  
par CHARLES DE GAULLE

*Eléments  
d'une Politique Etrangère*  
par HAROLD L. ICKES

*Troisième  
ou Quatrième République?*  
par PIERRE COT  
et MIRKINE-GUETZEVITCH

*L'Organisation de l'Europe*

TABLE RONDE:

NORMAN ANGELL • MAX BEER  
HENRI BONNET • PIERRE COT  
LOUIS DOLIVET • FELIKS GROSS  
JOSEF HANC • FINN MOE • CARLO SFORZA  
RUSTEM VAMBERY

LETTRE DE PARIS:

*La Vie dans l'Effroi et l'Espoir*

Montréal, Décembre 1943  
Vol. I, No II, Prix: 60 cents

ションは次のように記す——「これはジッドの日記の抜粋だが、いわゆるオリジナルではなく、英語版からの重訳であることを断っておかねばならない。だが、テキストが本紙の読者の関心を惹くものであることになんら変わりはない」<sup>8)</sup>。言うまでもなく、つい半月ほど前に『フリー・ワールド』に載った英語版からの翻訳である。訳文はおおむね正確であるが、ただしタイトルは「La libération de Tunis」とされている。スペイン語では「délivrance / deliverance」の対応語は一般に「liberación」であることに影響されたためか。これに続いては、11月にニューヨークでジャック・シフリンの経営するパンテオン・ブックスから『架空会見記』フランス語版第3版しゅったいが出来。「チュニスの解放」はその巻末に配される<sup>9)</sup>。

### 『コンバ』紙

年が明けて1944年1月9日、当時はアルジェで印刷されていたレジスタンスの非法紙『コンバ *Combat*』（本拠はパリ）も「チュニスの解放」を掲載している。ただし紙面を飾ったフランス語テキストはこれもまた「オリジナル」ではなかった。記事冒頭に付された解題の一部がそのことを語っている——

〔…〕ここに掲載するテキストは〔ジッド本人から〕得たものではない。なぜそれがイギリスで英語訳されたのか、その間の事情はいまだ我々には不明だが、巨匠の証言にそなわる興味は疑えない。アルゼンチンの勇敢なるド・ゴール派週刊紙『ラ・フランス・ヌーヴェル』がフランス語に訳し直したものである。本紙はそれを転載する。<sup>10)</sup>

文中の「イギリスで英語訳された」は、『ラ・フランス・ヌーヴェル』の註記「traduction effectuée d'après la version anglaise」を読み違えたための明らかな誤り。記事のタイトルは当然ながら「La libération de Tunis」と銘打たれているが、上掲解題ばかりか、ジッド自身の証言からも、この重訳掲載が彼の同意を得たものではないことが分かる。1月17日にモロッコのフェズからヴォージェルに宛てた書簡のなかで、ジッドは次のように憤懣を語っているのである——「この地〔北アフリカ〕のある雑誌が厚かましくも私の《チュニス日記》を掲載しました……しかも英語から訳されたものをです！抗議しようにも手の打ちようがありません」<sup>11)</sup>。

## 『架空会見記』（英語版・スペイン語版）

「チュニスの解放」はジッドの単行版『架空会見記』の英語版・スペイン語版の巻末にも収められた。それらの出典をごく簡略に述べておこう——。マルコム・コウリー訳の英語版「The Deliverance of Tunis」は1944年のコピーライト表示を付して、ニューヨークの老舗出版社アルフレッド・K・クノップから出来（*Imaginary Interviews*）。またマルガリータ・アベイヤ・カプリレとマルタ・アコスタ・ヴァン・プラエ共訳のスペイン語版「チュニジアの解放 *La liberación de Túnez*」はブエノス・アイレスの出版社エメセ・エディトーレスの「大随想家」叢書第9巻（*Reportajes Imaginarios*, 刷了は同年8月18日）に収載された。

## 『発禁時評』、『レ・レットル・フランセーズ』紙

チュニス解放の記述を含む日記抜粋は同年夏、ミニユイ出版から非合法で刊行された『発禁時評』第2巻（刷了は7月14日）にも収録されている。同巻にはジッドのほかに、シャルル・モルガン、レイモン・モルティメ、アンドレ・シャンソン、またそれぞれ「ラ・ヴァランティーン」「モージュ」の変名でガブリエル・オーディシオ、クロード・ベランジェのテキストが並ぶ。

やがて8月25日には待望のパリ解放。これに伴い、「フランス作家国家委員会」の機関紙『レ・レットル・フランセーズ *Les Lettres françaises*』（1942年にジャック・ドクールとジャン・ポーランが創刊した週刊紙）は合法化されるが、その11月18日号は第1頁冒頭に「チュニスの解放」を再録掲載する。掲載にあたっては次のようなキャプションが付されていた——「アンドレ・ジッド氏は最近我々に作家国家委員会への賛同・加入を通知してこられた。本紙としては、『贗金つかい』の著者がミニユイ出版刊『発禁時評』第2巻に収めた、チュニス奪還にかんする文章の抜粋を以下に掲載することを喜びとする」<sup>12)</sup>。記事自体は著者自身の許可をえず掲載されたものであったが<sup>13)</sup>、そんな事情なぞ露知らぬルイ・アラゴンがこれに激しく噛みついた。翌週号（25日付、発行はおそらくその前日）のやはり冒頭に載った一文「アンドレ・ジッドの帰還」で、共産党の花形作家はそれなりの留保は付しながらも、ナチスに殺されたドクールの名を掲げ対独抵抗を貫いた同紙が、今なお国外に留まり続けるジッドの文章を恭しく冒頭に掲げたことを厳しく難じたのである——「私はなにもジッド



氏を銃殺せよと言うのではない。『レ・レットル・フランセーズ』に彼を書くものは載せるなど要求しているのだ<sup>14)</sup>。このような不穏な情勢を案じたフランソワ・モーリアックやマルタン・デュ・ガールら友人たちは年末から翌年初頭にかけて、ジッドの立場がいかに堅固であっても、今しばらくは帰国を思いとどまるように忠告・説得<sup>15)</sup>。それもあってか、彼がパリに戻るのはようやく半年後、1945年5月6日のことであった。

### 『日記』での収載

チュニス解放の記述はジッドの最晩年と没後まもなく、いずれにおいても無題であるが、『日記』の4つの版に収められる。すなわち、まずは1950年にガリマールから刊出の『日記（1942-1949年）』（刷了は同年2月10日）。次いで、ニューヨークとロンドンで同時出版されたコロンビア大学教授ジャスティン・オブライエンによる英語訳『アンドレ・ジッドの日記』第4巻（1951年）<sup>16)</sup>。そして、ともに翌52年出来の『詩、日記、回想』（ガリマール）第2巻と、新庄嘉章訳の新潮社版『ジイドの日記』第5巻である。さらにその後も、スペイン語版（1963年）やドイツ語版（『ジッド全集』第4巻、1990年）、イタリア語版（2016年）などの『日記』も当該記述を収載したが、筆者の調査・実見にもとづき以下に掲げる一覧にはプレイアド版の『日記』新旧両版のレフェランスを記すにとどめよう。

\*

### Références bibliographiques de «La Délivrance de Tunis» par André Gide

1. «La Délivrance de Tunis. Pages de journal», *La Syrie et l'Orient*, 4 septembre 1943, pp. 3-4.
2. «The Deliverance of Tunis», *Free World* (New York), vol. VI, n° 4, October 1943, pp. 323-326 [trad. par Albert Lippman].
3. «La libération de Tunis», *La France nouvelle*. Le grand hebdomadaire de l'Amérique latine (Buenos Aires), 15 octobre 1943, p. 7, col. 1-8 [retraduction française d'une version anglaise (parue dans *Free World*)].
4. «La Délivrance de Tunis. Pages de journal», dans *Interviews Imaginaires*, New York : Pantheon Books (distributed by Jacques Schiffrin & Co.), 1943 (ach. d'impr. le 2 novembre 1943), pp. 227-243.

5. «La Délivrance de Tunis», *Le Monde Libre* (Montréal), vol. I, n° 2, décembre 1943, pp. 119-122.
6. «La libération de Tunis», *Combat*, 4<sup>e</sup> année, n° 92, 9 janvier 1944, p. 8, col. 1-5. [réimpression de la traduction française parue dans *La France nouvelle*].
7. «The Deliverance of Tunis. Pages from a Journal», *Imaginary Interviews*, New York : Alfred K. Knopf [copyright 1944 by Jacques Schiffrin], 1944 (sans ach. d'impr. ; trad. par Malcolm Cowley). pp. 155-164.
8. «La Délivrance de Tunis», *Chroniques interdites II*, Paris : Éd. de Minuit, 1944 (ach. d'impr. 14 juillet 1944), pp. 32-39.
9. «La liberación de Túnez. Páginas de Diario. Mayo 1943», *Reportajes Imaginarios*, Buenos Aires : Emecé Editores, coll. «Grandes ensayistas», 1944 (ach. d'impr. 18 août 1944 ; trad. espagnole par Margarita Abella Caprile et Marta Acosta van Praet), pp. 189-201
10. «La Délivrance de Tunis», *Les Lettres françaises*, 4<sup>e</sup> année, n° 30, 18 novembre 1944, p. 1, col. 1-4 et p. 8. col. 6-7.
11. [Sans titre], André GIDE, *Journal 1942-1949*, Paris : Gallimard, 1950 (ach. d'impr. 10 février 1950), pp. 168-176.
12. [Sans titre], *The Journals of André Gide*. Translated from the French, with an Introduction and Notes, by Justin O'Brien, vol. IV : 1939-1949, New York : Alfred. A. Knopf / London : Secker & Warburg, 1951 (sans ach. d'impr.), pp. 209-214.
13. [Sans titre], André GIDE, *Poésie, Journal, Souvenirs*, 2 vol., Paris : Gallimard, 1952 (ach. d'impr. 9 août 1952), t. II, pp. 762-766.
14. [無題], 新庄嘉章訳『ジイドの日記』第4巻, 新潮社, 1952年〔11月24日印刷・同月28日発行〕, 266-272頁 (新版は『ジッドの日記』第5巻, 日本図書センター, 2003年2月25日発行, 248-254頁)。
15. [Sans titre], André GIDE, *Journal 1939-1949. Souvenirs*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1954 (ach. d'impr. 17 juillet 1954), pp. 235-241.
16. [Sans titre], André GIDE, *Journal, II (1926-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Martine Sagaert, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1997 (ach. d'impr. 18 avril 1997), pp. 950-956.

## 註

- 1) Voir Jacques COTNAM, *Bibliographie chronologique de l'œuvre d'André Gide (1889-1973)*, Boston (Mass.) : G. K. Hall & Co., 1974, p. 249, n° 708.
- 2) Voir les lettres de Gide, des 24 et 29 juillet 1943, reproduites par Jean GAULMIER, « Quelques souvenirs sur André Gide », *Bulletin de la Faculté des Lettres de Strasbourg*, mars 1969, pp. 340-341.
- 3) Description du *Journal* du 8 mai 1943.
- 4) Fragment d'une lettre de Jean Gaulmier à Jacques Cotnam, cité dans la *Bibliographie chronologique de l'œuvre d'André Gide (1889-1973)*, *op. cit.*, p. 249, n° 708.
- 5) たとえばフランス国立図書館が所蔵する同紙は保存状態がきわめて悪く、現時点では閲覧・複写が許されていない。なお、美術批評家でもあったヴォージェルは1921年から翌年にかけて、ともにジッドがフランス語訳したシェイクスピア『アントニーとクレオパトラ』とタゴール『アマルと王の手紙』（原題『郵便局』）の挿絵入りや木版画入りの豪華版を出版している。
- 6) Voir Jean GAULMIER, *art. cité*, p. 340.
- 7) パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫現蔵の未刊書簡（整理番号 γ 853.2）。
- 8) *La France nouvelle*, 15 octobre 1943, p. 7, col. 3.
- 9) なお、フランス語版『架空会見記』の初版（Yverdon et Lausanne : Éd. du Haut-Pays, 1943）および第2版（Paris : Gallimard, 1943）には「チュニスの解放」は収められていない。
- 10) *Combat*, 9 janvier 1944, p. 8, col. 1.
- 11) ヴォージェル宛未刊書簡（個人蔵）。
- 12) *Les Lettres françaises*, 18 novembre 1944, p. 1, col. 1-2.
- 13) Voir la lettre de Gide à Roger Martin du Gard, du 5 décembre 1944, dans leur *Correspondance (1913-1951)*, 2 vol., Paris : Gallimard, 1968, t. II, p. 290.
- 14) Voir Louis ARAGON, « Retour d'André Gide », *Les Lettres françaises*, 25 novembre 1944, p. 1, col. 1-2 et p. 5, col. 4-6. 本文中の引用は同論文の第5頁・第5段。
- 15) Voir par exemple la lettre de Mauriac à Gide, du 2 janvier 1945, dans leur *Correspondance (1912-1950)*, Paris : Gallimard, 1978, pp. 102-103.
- 16) 同版の人名索引作成のためにオプライエンはしばしばジッド本人に直接情報を求めていた。Voir André GIDE - Justin O'BRIEN, *Correspondance (1937-1951)*. Édition établie, présentée et annotée par Jacqueline Morton, Lyon : Centre d'Études Gidiennes, Univ. de Lyon II, coll. « Gide / Textes », 1979.